

「知事とのわいわいミーティング」(平成20年7月8日実施)佐井村会場の概要について

「知事とのわいわいミーティング」を7月8日(火)午前10時から、佐井村三上剛太郎生家で開催しました。当日の概要をお知らせします。

「知事とのわいわいミーティング」は、知事と県民の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。佐井村は今年度第1回目の開催となりました。

当日は、約20名の村民の方が参加され、6名の方からご提言・ご提案がありました。その概要は次のとおりです。

- (三上剛太郎...日露戦争の際、手製の赤十字旗を翻し、ロシア兵を含む多くの負傷者を治療したことで知られる佐井村出身の医師)
-

三村知事あいさつ

佐井村は、このところ観光で訪れるお客さんも多く、仏ヶ浦とを結ぶ観光船も好調と聞いています。



我々としては、いよいよ2年後に迫った東北新幹線新青森駅開業に当たり、下北全体を観光ルートの中でどう発展させていくか、そのためには、県として道路のことを含め、しっかりと対応していかなければならないと思っています。

今日は、地域づくりにかける皆様方の思い、あるいは、下北半島全体として、このような仕組み等があれば、元気になっていくのではないかなというご提言、ご提案をいただきたいと思います。

一人ひとりの県民の皆様方がこの青森県を支えています。そしてまた一人ひとりの県民の皆様方の思いというものを県政の中に可能な限り生かしていく、それが自分の仕事だと思っています。

今日は、本当にお忙しいところ、こうしてご参集くださり、心から感謝申し上げます。

佐井村・太田村長あいさつ

今日は、当地で、未来デザイン県民会議「知事とのわいわいミーティング」が開催されますことを誠に喜ばしく、お礼申し上げます。ようこそ佐井村においでいただきました。

さて、この催しは知事と県民の皆さんが直接意見交換を行い、それを県政に反映させることにより県民参加型県政の推進を図ることを目的としているものです。

この未来デザイン県民会議の趣旨は、平成19年6月佐井村定例議会において議決成立しました「佐井村むらづくり基本条例」の基本理念である自主自立に向けた共同参画、共同で地域づくりを推進するという精神とまったく一致するものです。

本日は、6名の方々の貴重なご提言・ご提案を拝聴し、村政運営の糧としたいと考えています。この会議が、県はもとより、わが佐井村の振興にとっても有意義なものとなるよう祈念し、あいさつとさせていただきます。

発言者1（男性・50歳代）

佐井村沿岸は、7月から8月中旬にかけて、県内有数の天然もずくの産地ですが、平成20年3月に、価格が安く販売に苦慮するためほとんど未利用となっている笹もずくを活用した「津軽海峡産天然もずくラーメン」を発売しました。

天然もずくの中で比較的ねばりが少ない笹もずくをボイルし、乾燥して粉末にしたものを何とか活用できないかと考え、県の下北ブランド研究開発センターに技術提供をしていただき、また、むつ市の製麺会社の協力を得て発売となったものです。

当初は、中間業者経由で、県内スーパーなどで販売する予定でしたが、急激な小麦粉の高騰により、中間業者経由では消費者への末端売価が高くなることから断念せざるを得ず、各種物産販売場、催事場等で直接試食させながらの販売を行っています。お陰様で発売約3か月間で2食入り3,000袋を販売でき、新製品の「つけ麺風」も近く発売予定です。

しかし、当漁協では、厳しい経営により、水産加工品のPRが思うに任せない状態であり、是非、県として販売のためのPRに力を貸してください。

知事

青森県には様々な資源がありますが、食の資源、食材王国あおもりだということをはばからずどこへ行ってもお話ししています。その中で、我々は様々な青森県産品を売り出してきたという自負があります。

そして、「攻めの農林水産業」ですが、全国で初めてしじみやホタテをトレーサビリティシステムをつくって販売し、青森のものは安全・安心できちっと管理されていておいしいということが評判になっています。

佐井村と言って私がまず思い出すのはソフトホタテ、昔からチャレンジ精神あふれる漁協の方々。そして、佐井村は宅配サービスや県外での販売ということについても我々が「攻めの農林水産業」を推進するよりもずっと早くから取り組まれていました。

先般、県庁において、もずくラーメンを食べさせてもらいました。もずくというものをテーマに打ち出してくれたこと、そして、県の下北ブランド研究開発センターの技術者と連携してくれたことをうれしく思います。



フコイダンを含むもずくは、がん予防対策等にもなり、そうした機能性の高さということも、一緒にPRしていかなければならないと思います。このもずくに注目してくれている大手流通業界の方々も増えてきており、我々も一緒にこのラーメンをきっかけとして、観光キャンペーンをやっていかなければならないと思っていました。

また、県では、大手流通業界の方々、県内外の方々を含めて、商談会を行っていますので、是非活用していただきたいと思います。

下北地域県民局長

下北ブランド研究開発センターが平成13年にできてから、地域の方々、特に漁協の方々と新しい製品開発に取り組んできました。地元で獲れるいろいろな水産物を活用して、既存の設備で取り組めるような技術開発を中心に行ってきました。

魚介類、海藻類は、いろいろな機能性成分を含んでおり、それを生かした新しい加工品開発に取り組んでいますので、ご相談ください。

村長

やはり漁業に元気がないとこの佐井村は駄目なのです。この長い海岸線をどう利用するか、それが天然もずくです。そして、どのような付加価値を付けたらいいか、漁業と観光をどうリンクさせたらいいかが課題であり、漁業者の後継者問題と併せて、我々も考えていますが、お力添えください。

知事

下北半島のためにも、この漁村集落が残っていくためには、それぞれがきちんと生活していける仕組みということと共に考えなければならぬと感じています。

例えば隣りの大間のまぐろと佐井のもずくのPRと一緒に連携して行ったりとか、お互いにそれぞれの特産品をPRしていくこと、それがこれからの勝負どころだと思っていますので、県民局を活用いただければと思います。

発言者2（女性・60歳代）

仏ヶ浦裂織のグループでアルサスに出店していますが、最初は12、13人しかいなかったメンバーも現在では、35、36人になっています。当初は、メンバーの誰も裂織の経験がなく、尾上から先生に来てもらって習い、ほとんど付け焼き刃で始めたようなものでしたが、観光客が珍しがってくれて売り上げはどんどん伸びていきました。

そして、最近になって、全国的な組織があるのを知り、加入したのを機にいろいろな提案を受けるようになり、今は試験段階ではありますが、新しいことをやれるようになってきました。当初から何とか産業にできないかというのが眼目だったので、その理想を追い続け、今ようやく緒に就いたという感じです。

しかし、ひとつ残念なのは、PRに使えるインターネットのできる人がいないということです。当初のメンバーが60歳代、70歳代と高齢化しており、今後は30歳代、40歳代の人材を育成し、パソコンに強い人も仲間に引き込んでいきたいと思っています。

知事

今のお話を伺って、本当にチャレンジャーとして頑張ってきてくださったと思いますし、産業化ということも含めて検討されていたということがうれしくなります。そもそも青森県というか、日本の歴史を考えていく上でも、佐井がいかに歴史があるかということは、ここに時宗（浄土宗の一派）のお寺があることでもわかりますし、福浦の歌舞伎などの文化が集落ごとに残っており、海の交通路を使い、中国や朝鮮半島と一番自由に行き来したのも、この佐井の方々なわけです。そういう意味においても、人材が出てくる場所だと感じていましたし、また、海洋民族のチャレンジ精神で、挑戦者が出てくるということを楽しんでいます。

ただいま、裂織のサンダルを見せていただいて、いいなあと感心しました。今、世界中で日本語の「もったいない」ということばが流行っています。昔の女性が残しておいてくれた古いきれいの糸をほどいて、それを裂織として再生して使う。歴史と伝統、そして、女性の人たちが生きて来た証、その魂をもう一回よみがえらせるという仕事をしてくださっていることを私は非常にうれしく思います。

また、リユースやリサイクルを実践しているのがこの裂織なのだということを、いろいろな意味で、PRしなければならないと感じました。

企画政策部報道監

下北地域県民局などの各県民局はすべてホームページを持っており、トータルでサポートしてもらえるところですので、是非、地域連携部の地域支援室にお越しになって自分たちが考えていることとか、どこか外に向かって情報発信したいことを相談してみてください。

インターネットについては、例えば高校生などは自分でホームページをつくったりしていますので、その知恵を活用する方法もあると思います。

下北地域県民局長

是非こちらからお伺いして、いろいろお話を聞いて、できることからサポートしていきたいと思います。

発言者3（女性・50歳代）

私は、介護の仕事に携わっており、我々の世代の田舎志向が高まっている中、中高年の生活と高齢者が元気で生きていける村づくりを考えることが重要だと感じており、提案します。

高齢者の一人暮らしが多く、地域で孤立しないで、元気で暮らせるためにどうしたらいいかという、要支援の状態、少しの手伝いがあれば生活できるという時期に、周囲と連携をとりながら暮らしていける高齢者住宅をつくってはどうかと思います。

また、生活の支援さえあればまだまだ元気にやれる高齢者のための介護保険外のサービスネットをつくってはどうかと思います。ちょうど退職したばかりの人たちのいろいろなノウハウや力を生かすためのネットワークをつくり、必要な援助を供給していくことが重要です。

そして、田舎志向の高まりを背景に、村にある空家などを利用して、滞在型の観光に取り組んではどうかと思います。私自身インターネットでいろいろなサイトを見るのが好きで、田舎暮らしの情報にしても、顔が見える、姿が見えるような宣伝をすると効果があると感じています。

以上が、これからの佐井村が元気であること、あるいは、青森県という自然が豊かで食べ物がたくさんある地域にとっては、いい方向性なのではないかなと思います。

「少ない年金で豊かに生きる」これを目標にした村づくりをしたらいいと思います。

村長

我々が定年になって、その後の第二の人生になっても、その人たちの長年の経験を佐井村で何とか生かせないものかなということで、我々も庁議の場などで、例えばシルバー人材センターのようなものを立ち上げなければならないという話をしています。それに、介護予防的なことも含めて考えるべきだということで議論しています。

知事

介護の世界で活躍してくださっているということで、大変ありがとうございます。

また、自分自身、元町長からこの世界へ入ったのですがけれども、保健・医療・福祉包括ケアシステムということを真っ先にきちっと始め、知事としても全体に広げようとしてい

ます。

一人ひとりの県民の方々に、保健としての健康づくり、医療として病気になったときにどうケアするか、福祉として本当に倒れたときにどう助けるかという命のセーフティネットをつくるという仕組みを行ってきましたが、このところ特に重要と思うのは、住民の方々のネットワークという第4のパワーです。

青森県の場合ボランティア活動に参加してくれる人が多いものですから、こうした高齢者の人たちを皆で守りましょうということで、声をかけさせていただき、地域包括支援センターをそれぞれの市町村でつくってもらって、地道ですけれどもスタートさせていました。

また、私の経験からもシルバー人材センターについては、佐井村単独では難しくても広域で、例えば北通りでシルバー人材センターをお始めになるようなことができればと思います。

また、集合住宅の話がありましたが、我々県の方では、県営住宅トータルサポート推進事業ということを始め、要するに、対象者に高齢者の方々も含めていろいろな形で地域住民と一緒に一人ひとりを守っていくという展開をしています。

村長

集合住宅の件ですが、社会福祉協議会で10戸ほど運営しているのですが、法律上の制約もあるため、社会福祉法人の方とも相談し、活用について考えていきたいと思っています。

知事

それから、田舎暮らしについて、空家をうまく使おうという提案がありました。

我々は、南部町の「達者村」でそのような方向性とか、地域資源としての空家などを活用し、長期滞在してくれる人たちが居られるような仕組みを提案し、実際にそのような長期滞在の方々も増えてきました。

その長期滞在の一手手前の段階にグリーンツーリズムというのがあり、南部町のあたりは、このグリーンツーリズムを通じて、修学旅行生などを関西の方から連れてくるのが盛んで、修学旅行で来てくれた生徒さんが青森を気に入って弘前大学に入って医者になって青森に残ってくれる人が出てくるのです。これはおもしろいですね。青森の魅力発信を県外の子どもたちにもやってきたということです。

現在は、北通りの風間浦村で「ゆかい村」といって、愉快地風呂に入って、魚を釣って楽しめる村ということを始めしています。

「あおもりライフおためしステイ」という企画も呼びかけており、また、夏場だけでもよいので来てほしいということも含めて、いろいろなキャンペーンをしているのですが、なかなか現実としてこちらにも住んでもらう二地域居住というのは課題が多いと思っています。

ます。

もし、下北の中で「ゆかい村」がおもしろいということになりますと、佐井の方に静かに暮らせるところがあるようだということにもつながっていくことにもなるので、そういう魅力を打ち出していかなければならないと思いました。

下北地域県民局長

「あおもりライフおためしステイ」では、下北地域のむつ市川内と風間浦村の2か所で田舎暮らしの体験ができるということで紹介されています。是非この佐井村にもいい自然がありますので、このような体験、滞在ができるような取り組みとしていただければと思います。これについても県民局でいろいろお手伝いできることがあると思いますので、ご相談いただければありがたいと思います。

発言者4（男性・60歳代）

下北半島国定公園には、全国でも珍しい海中公園として佐井村の仏ヶ浦とむつ市脇野沢の鯛島が指定されています。ダイバーの方々が訪れ、漁協の許可を得て、海に潜る訓練をしているようですが、これを何とか売り出して収入を得るよい方法はないのでしょうか。

そして、天然記念物のオオウラヒダイワタケが生息する縫道石山ぬいどういしやまと、その隣に位置する地図作成の三角測量の一等三角点のある大作山だいさくやまは、県外からも多くの登山客が訪れていますが、残念ながら地元では、あまり知れ渡っていないため、何とか、ボランティアの力で草を刈り、山道を整備するなどして、大々的に宣伝すべだと思います。

また、自然を利用した風力発電について、4、5年前から測定器も設置されましたが、何とか村の財政のためにも進めていってほしいと思います。

それから、外からお客さんに来てもらうためには何と言っても道路の整備が必要です。どうか県庁所在地から一番遠い、我々佐井村民の願いでもありますので、よろしく願います。

知事

まず、海中公園ですが、素晴らしい海があるということを感じます。県では、観光ベンチャー創出事業を展開させており、平成19年度では、下北観光研究会の恐山座禅体験や大間エスコートクラブの観光ガイドサービス事業が採択されており、このような支援の仕組みを提供するということを進めています。

次に、縫道石山と大作山の話ですが、確かにチャレンジしたい山ではありますが、地元の人が知らないでいる、というようなこともあり、登山案内のパンフレット等でPRもしています。また、資源エネルギー庁の協力で、登山道の草刈りなどが始まってきましたので、是非村の方でも声をかけていただき、地域で支えることが必要かと思っています。

また、風力発電については、従来の風力の発電出力の変動を蓄電池を用いて安定した電

力供給を行う世界で初めての実証が始まり、海外の企業等もそれに出資しています。

それがうまくいけば、日本だけでなく、アジア、アフリカなどのいろいろな場所でも蓄電池型風力による安定した電気を供給できるようになり、我々は確実に成功させたいと思っています。逆に言うと少しお時間をいただければ、この蓄電池併設型風力発電が低コストで運営できるとなれば、この下北半島のいろいろな場所までも普及することが可能であると考えています。

村長

風力発電は、財政の一旦を担うことから、関係機関に対し再三にわたりお願いをしてきましたが、まだ目途は立っていません。我が佐井村も風力発電に十分に適している地域であり、今後も要望をしていくつもりです。

それから、縫道石山については、現在県代行で整備を進めている福浦・川目線の整備によって、まだまだ登山者の方も増えていくと思っています。

知事

道路の整備については、知事になってから、特にこの下北縦貫道路については、年間24億円内外の予算を投入しています。また、45億円内外の予算を投入して、平成21年度までには国道279号風間浦村易国間地区で落石の危険性のある岩塊を撤去することとしています。

また、佐井村については国道338号長後バイパスを整備することとしており、下北全体の基本的な生活を守っていくため、道路のネットワークをきちんと整備していかなければならないという強い思いで取り組んでいます。

下北地域県民局長

海中公園の利用方法につきましては、先ほど知事から話のありました観光ベンチャー創出事業などを活用して検討していただければと思います。

また、縫道石山と大作山のPRについては、平成18年度に下北観光協議会で作成したパンフレット「下北半島登山案内」、平成19年度に県民局で作成した“下北かるた”による「下北を知る講座」テキストにおいて紹介しています。

私も縫道石山には2回登りましたが、頂上は大変見晴らしがよく、非常にいい山だと感じていますので、今後もいろいろな方法で特に山の専門誌などを使いながら、縫道石山と大作山のPRをしていきたいと思っています。

発言者 5（男性・30歳代）

昔、戊辰戦争に敗れ、焼け野原となった長岡藩に、三根山藩から米百俵が寄贈された際、長岡藩の小林虎三郎が教育第一主義を唱え、その米百俵の売却益を元手に、学校を設立し、多くの人材を育て上げたとされています。

私も、国もまちも栄えるのは、まず始めに人有りき、優秀な人材がいてこそだと考えています。

少子高齢化の著しい当村においては、数年後には今以上に、急速に少子高齢化が進み、財政負担の増加や若年人口の減少が社会活動の停滞や活力低下につながるものと思います。

まず大事なことは、若者たちに、子どもを産み育てることの喜び、楽しみ、そしてそれは、何事にも代えることができない大切なことであることを伝えることだと思います。

そのためには、若者が地域に定着することが必要であり、子育て支援体制の確立、子どもが伸びやかに成長できる環境づくり、新たなる雇用の場の確保が急務だと思います。

知事

特に、人づくりということについて、大変大きな提案をしてくれたと思っています。

県全体として、次の時代をどう切り拓いていくかという場面を考えたときに、やはり、「人」ということに行き当たります。

医師不足の問題を例にとると、医学部に行っている青森県人そのものが少なく、さらには、医学部を受験する生徒も少なかったという現実がありました。

そこで、高校生のときから医師の仕事の素晴らしさを知ってもらう目的で、現役の医師や弘前大学医学部の学生に県内の学校に行って話をしてもらいました。そういうことを進めたところ、平成20年度入試において、県内から弘前大学だけで44名が受けてくれました。

また、我々はきちんと仕組みをつくって、地道に人を育てていかなければならないと考え、平成19年9月に「あおもりを愛する人づくり戦略」を提唱しました。これは、あおもりの今をつくる人財と、あおもりの将来



をつくる人財の育成を目標としています。また、ふるさとを愛してくれて、未来を支えていく人財育成の具体策として、このたび「あおもり立志挑戦塾」をスタートさせました。

子育て支援については、佐井村でも積極的に取り組まれている妊婦検診、あるいは、妊婦になる前の不妊治療についても支援の仕組みをつくっています。さらに、これも佐井村ではもう既に取り組まれているのですが、乳幼児に係る医療費の入学前までの無料化を市町村と連携して行うこととしました。

雇用の場の確保については、知事就任以来、企業誘致は工場の増設等も含め120件になりました。ものづくり産業が、技術というものに興味を持ち、それに携わる人間を育てているところにどっと来るような傾向になってきたと感じています。

さらに、本県産業の中心である農業の基本を支えているのは、水、土、人です。我々はこれまで、山・川・海をつなぐきれいな水づくりと「日本一の土づくり運動」に取り組んできました。それに加え、人づくりとして、「若手農業トップランナー育成方針」を定め、財務やマーケティングに通じた人財の育成に取り組んでいます。これも地道ですが、確実に農業を強化していくということです。

何と言っても重要なのは、「人」だと思っています。

企画政策部報道監

今、知事から話のありました次代のリーダーを育てるということで、「あおもり立志挑戦塾」ということを進めています。先般、塾長をお願いしている財団法人日本総合研究所理事長の野田一夫さんが、県内から応募のあった30名と面接したところ、皆一生懸命に自分や地域の将来を語ってくれたということで、30名全員を塾生に決定したところです。

7月19、20日と第1回の泊りがけの塾が開始されて、12月までの計6回が予定されており、その中で必ずや熱い心が注入され、塾生同士で深め合えるものだということで確信しており、私自身も大変楽しみにしています。

発言者6（男性・40歳代）

先般6月19日に佐井村で、条件不利地域におけるブロードバンド化促進のための調査研究会が行われ、ワーキンググループの一員に私も参加させていただきました。

総務省から条件が悪い地域にインターネット、ブロードバンドを行うモデル地域として佐井村が採択されたものです。

そこで、今まで漁協で荷受けできなかったざっぱ魚を、インターネットを通じて直販できるシステムを確立させたいと思っています。漁業者にしてみれば、今までお金にならなかった魚がお金になるわけですから、漁獲の喜びや働く意欲につながると思いますので、是非進めてみたいと思っています。

また、この土地に住んで唯一不便を感じることは、家族が大きい病気にかかったときで、実際に近くの病院に行った後、さらに紹介状を持参した病院から、検査入院ができないので今日は帰ってくれと言われ、2度ほど悔しい思いをしたことがあります。

村には診療所もなくなり、医療分野におけるブロードバンドの利用価値の議論に非常に期待を寄せており、遠隔医療等いろいろやる予定ですが、その前に、地域の病院と大きい病院の専門医とのネットワークとか、紹介状、受入態勢、受入準備というものをもっとうまくやってもらいたいと強く思っています。

知事

ブロードバンドの話ですが、総務省の東北総合通信局長が佐井に非常に興味を持ち、泊まり込みで佐井を見て歩いてくれました。そして、このようなところで、最新のIT機器が生活の中に入って暮らしを守っていく、それに関わる産業を置き、地域の方々がIT機器を用いているいろいろな方々とつながっていくような社会をつくっていきたいと、私に熱く語ってくれました。

ご提案いただいたブロードバンドを活用した新しい取り組みが具体化し、佐井の暮らしがよくなるということは、日本の中においても地理的に似たようなところのどこでもその仕組みを前例として使えるわけですので、つながってくると思います。

医療のお話がありましたが、むつ総合病院を中核病院として、大間病院をひとつの拠点として、地域全体を支えていこうということで再編成が行われました。中核病院にきちんと医師を配置することにより、医師を過重な労働から守る。そのことにより、若い医師がこの地で成長できる。下北は、良医を育てていくモデルとなる、そういう形を今整えています。

この地域では、ネットワークできるような仕組みは整いつつあるわけですから、中核病院、拠点病院、そしてかかりつけ医というひとつのラインの中で、かかりつけ医からきちんと情報が上がるような仕組みを我々の医療ネットワークの再編成の中に入れて考えなければならぬということを所管の部課へきちんと伝えます。

やはり、ここであれば、地域の拠点である大間病院へきちんと送り込める、大間病院から場合によってはむつ総合病院へ、そして県立中央病院へ送り込める、道路も含めたネットワークの整備、これをしっかりやっていきたいと思っています。

村長

村の中に医師がないということは住民の皆さんはすごく不安なのです。これがブロードバンドによりいくらかでも解消になればという思いで、期待を込めています。

また、青森と佐井をつなぐシラインが、平成20年10月の中旬頃に保冷設備を完備した新造船を就航することとなっていますので、これにブロードバンド化が加わり、産業の振興につながっていくだろうという思いでいます。

知事所感

今日は、貴重な時間をいただき、ありがとうございました。

積極的にご意見、ご提言をいただき、我々としても、なるほどこういうことが必要なのだということを感じた次第です。

また、村長さんにも、ご出席の上積極的にご発言もいただき、村民の方々の思いが村長さんにも伝わるのができたのかなと感じています。

私自身、小さい町出身であり、町や村が元気を保っていて、また、持続可能になってこそ、この国は保てるのだと思っています。この漁村集落とか、山村集落とか、我々は絶対守っていかなければならないという強い決意があります。

そのためにも、地域住民である皆様方のお声をいただくという非常に大切な機会をいただき、心から感謝しています。今日はありがとうございました。